

# タンザニアを知り、世界につなげる

河野 裕之

小田原市立桜井小学校

◆担当教科：全教科 ◆実践教科：総合的な学習の時間、外国語活動、社会科 ◆時間数：17 時間（11 時間・総合的な学習の時間、5 時間・外国語活動、1 時間・社会科で実施）◆対象学年：5 年 ◆対象人数：33 名

## ◆指導案

### ○実践の目的

各教科において日本は世界とのつながりが深いことを知り、いろいろな国と関わりがあり、さまざまな支援をしていることに気づかせる。そして、どういった分野で日本人たちが活躍しているのかに興味をもたせ、タンザニアについて日本と異なる食料事情・道路状況・教育の違いや同年代の子どもたちの様子について現状を知るとともに、開発途上国が抱えている問題に気づかせ、自分たちにできることを考えさせる。

### ○授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	「世界を一周してみよう」  ねらい：地図帳や地球儀を見ながら主な国の位置を知り、外国に興味をもたせる。（社会科の時間で実施）	(1) 白地図でタンザニアや他の国の位置をあてる。 (2) タンザニアやいろいろな国についての連想ゲームを行い、グループごとにできるだけ知っていることを書き出し、発表する。	(1) 白地図 (2) 地図帳 (3) 世界地図
2	「日本と世界のつながりについて」  ねらい：日頃の生活を振り返り、世界の国々につながっていることに気づかせる。	(1) 食べ物に注目させ、日ごろ食べている魚類などは外国からの輸入品が多いということを知り、外国とのつながりをより深く感じさせる。	(1) 外国の魚の写真
3	「世界で食べられる米について」  ねらい：米について調べ、米は日本だけではなく外国でも食べられていることに気づき、種類や生産場所に興味をもたせる。	(1) 日本の米の写真と海外の米の写真を見比べて、米は日本だけで作られているのではなく、世界各地で作られていることを知る。	(1) 日本米の写真 (2) 外国のお米の写真
4	「タンザニアについて調べてみよう」  ねらい：日本とのつながりの深い一つの国としてタンザニアを紹介し、コーヒーや淡水魚や日本とよく似た米が作られていることも知り、タンザニアという国に興味をもたせる。	(1) タンザニアの国の地図を使い、どこで何が作られているのか、何が取れるのかなど具体的に調べる。また、どういった人が働いているのかも写真を使って紹介する。 (2) タンザニアの小学生に聞いてみたいことも考えさせて、アンケートを作る。	(1) インターネットで調べたタンザニアの資料（写真など）  (2) アンケート
5 6	「タンザニアについて知り考える授業」  ねらい：渡航に対して何が必要かを児童たちなりに考えることで、タンザニアについて興味をもたせる。	(1) 「もし、自分が青年海外協力隊になってタンザニアに行くことになったら……」の問いについて考える。 (2) なぜそのものが必要なのかを考えることで、その国のことを理解させる。	(1) タンザニアで得た現地の写真と動画 (2) 協力隊の方が写っている写真と動画
7	「タンザニア〇×」	(1) 教室を半分に分けて、〇×ゾーン	(1) タンザニアで得た現地

8 9	ねらい:クイズに答えながら、タンザニアの文化や様子を理解させる。	をつくり、自分が考えるところに移動する。 (2)自分の考え・想像が実際の様子と同じだったか、違っていたかの意見を出し合い、なぜそうなったのかを話し合う。	の写真
10	「イリンガのおじいさんの思いを感じて」  ねらい:おじいさんの思いから、自分たちに何ができるのかを考えさせる。	(1)タンザニアのイリンガで出会ったおじいさんの思いを知り、自分たちにできることを考える。 (2)日本のいいところを伝えるための活動を考える。	(1)イリンガで出会ったおじいさんの写真
11 12 13	「桜井小学校や日本のよいところを紹介しよう」(外国語活動の時間で実施)  ねらい:自分たちが書いた英語がちゃんと伝わるかを考え、ALTにきいてもらい、言語に対する意欲をもたせる。	(1)英語やスワヒリ語等の外国語の単語を調べる。 (2)4～5人のグループをつくり、桜井小学校や日本のいいところを紹介する活動を行う。	(1)デジタル教材(e-黒板) (2)作成した英語の紹介カードと原稿
14 15	「もし、日本の学校に外国人(タンザニア人)の先生が来たら」(外国語活動の時間で実施)  ねらい:桜井小学校や日本のよいところの紹介で使ったクラスルームイングリッシュ・キーセンテンスを使い、タンザニアのよいところをALTに紹介させる。	(1)タンザニアのよいところを考え、英語やスワヒリ語等の外国語の単語を調べる。 (2)4～5人のグループをつくり、タンザニアのいいところを紹介する活動を行う。	(1)スワヒリ語の原稿
16 17	「世界に目を向けよう～今、みんなにできること～」(「支援」ってなに?「支援」の前に考えよう)  ねらい:課題であった「支援物資」に注目し、支援することについて考え、国際理解を図る。	(1)タンザニアの人の本当の願いや思いを、実際に行った教師の言葉や資料から感じる。 (2)今まで授業を考えていたときやタンザニアについて紹介したときの「タンザニア」という国や人のイメージとは少し違った視点を感じて、「違いがあるからこそ、それがいい」という思いをもつ。 (3)自分たちが、今何をすることが大切なのかを話し合い、「支援」につなげかける。 (4)それぞれの条件において支援することがよいのかよくないのかをグループで話し合い、支援することの大切さと重要性を理解する。	(1)作成したワークシート(DEAR教材をアレンジ)

## ◆ 授業の詳細

### 1 時間目

「世界を一周してみよう」(社会科で実施)

ここでは、5年生社会科の「私たちの暮らしと国土」の単元と合わせて実施した。地図帳や地球儀の使い方を知り、緯度・経度だけで国名をあてるゲームを行い、国を知ることの楽しさをゲーム感覚で知った。また、地図帳の見方を知ることで、日本と他の国の距離や環境の違いを知ることができ、意欲的に活動をしていた。

その中で、いろいろな国の位置を知ることができ、同時に外国への興味づけのきっかけとなった。この授業の後から、自主的に家庭学習で、外国のことを調べてきたり、国旗を調べてその国について説明を書いたり、多くの児童が外国に興味をもち始めた。その後「タンザニア」という国の存在を伝えたことで、「タンザニア」という国にスポットがあたり、さらに調べたいと思う児童が増えた。

\*この時は、まだ児童に教師がタンザニアに行くことは伝えていない。

### 児童の感想

- ・もっといろいろな国を調べてみたい。
- ・アフリカにはいくつ国があるのかな？
- ・国旗を書くのが楽しい・・・など

地図帳の見方が中心であったが、いろいろな国があることを知り、素直に喜んでいる様子であった。日本から近い国はよく知っているが、ヨーロッパや東南アジア、そしてアフリカに関してはほとんどなじみがなく、国旗の色だけでもかなり興味をもっていた。まずは、タンザニアだけでなく、たくさんの国の国旗から入り、家庭学習などでも自主的に学習できる環境をつくりながら、活動を広げていった。

### 2・3時間目

「日本と世界のつながりについて」「世界で食べられる米について」

日頃の生活を振り返ることで、自分達が食べている物にはどういった食材があるのかななどの疑問にぶつかる。食料はいろいろな世界の国々とつながっていることを気づかせるのにとっても良い教材である。事前の社会科の授業の中で「食料生産について」「日本の食糧事情」について学習していたので、その流れで学習に入った。また、「日本の農業について」や総合的な学習の時間で行っていた「田植え・稲刈り」から、「お米について」の学習を進めていた。そのこともあり、「海外のお米」について興味をもつ児童が多くいた。米について調べ、米は日本だけではなく外国でも食べられていることに気づき、種類や生産場所に興味をもたせることができた。

また、授業が進むにつれて視点が「食べ物だけではないよね」「物などもたくさん外国からも輸入している」という意見が出た。特に自分たちが着ている服は、タグを見ると日本製のほうが少ないという結果になった。日頃わかっているように見落としがちな「Made in ~」を見ることで意外な気づきがあり、それと合わせて特に関わりの深い国はどこなのかという疑問に向かって授業が進んだ。

\*この時は、まだ児童に教師がタンザニアに行くことは伝えていない。

### 4時間目

「タンザニアについて調べてみよう」

日本とのつながりの深い一つの国としてタンザニアを紹介し、コーヒーや淡水魚や日本とよく似た米が作られていることを知り、タンザニアという国に興味をもたせた。インターネットや社会科の資料集や図書館の本を使い「タンザニア」について調べさせ日本との関わりが深いものを見つけさせた。タンザニアを調べることで、関わりの深い「キリマンジャロコーヒー」や「ナイルパーチ」という淡水魚の存在が挙げられた。また、アフリカでも米を作っている文化があることに「日本のお米に似ている」というキーワードも挙げられた。

そこで、担任が「今、みんなの調べたタンザニアに行くことになりました」ということを初めて伝えると、「本当に日本とタンザニアは関わりが深いの



上記の写真：桜井小で人気の給食と  
桜井発祥の二宮金次郎

かを調べてきてほしい」と児童が感想に書いてきた。また、「同じぐらいの年の人たちに日本の印象を聞いてきてほしい」という考えになり、質問紙を作り、それをもって現地の学校で交流することにした。そして、ただ調べてくるのではなく、自分たちも日本からのプレゼントを渡したいということで、折り紙を折ったり、包み紙を作ったりし、その他に桜井小学校を紹介するカードを休み時間なども使い作成し、意欲的に活動を進めた。

## 5・6時間目

### 「タンザニアについて知り考える授業」(タンザニアから帰国後の初めの授業)

まずは、タンザニアに行ってきた素直な感想を児童と共有し、アンケートの結果や授業の様子を伝える時間を取った。とても興味をもって活動を行っていた。

(児童と共有した内容)

テーマ：「タンザニアを散歩する→三歩→三ポ→三つのホッ→ホッとした三つのこと」

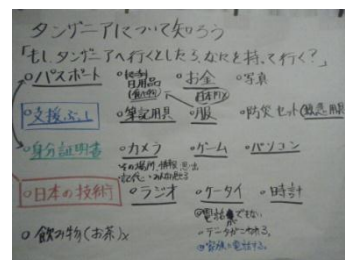
1つ目は、子どもたちの期待を裏切ることがなくてホッとした。子どもたちは「タンザニアに行きたい」と思っており、タンザニアの人たちの温かさや人柄、環境なども含めて、行ってみたいと思える国であった。

2つ目は、タンザニアの人達が笑顔で迎えてくれることにホッとした。こちらからスワヒリ語で話しかけたりコミュニケーションを取ろうして表現したりすると明るく笑顔で返してくれた。カリブ精神が浸透しており、「みんな友達」という意識を感じた。

3つ目は、つながりあえることにホッとした。携帯電話の普及は近年めまぐるしく成長している。どれだけ貧しくとも、ほとんどの人が携帯を持っていた。どんな場所にいってもつながってられるツールの一つである。そして、日本とタンザニアにおいてもつながってられる一つの方法である。距離的には遠いが、音声という媒体を通せばとても近くに感じることができた。・・・など

タンザニアのことを共有してる中、「なぜ先生たちのほかに日本人の人が写真や動画に写っているのか」という疑問が生まれ、現地では出会った「青年海外協力隊」の方々の存在を知り、改めて日本とタンザニアとの関係について知ることができた。

その導入をきっかけとして、まずは「青年海外協力隊」の存在について調べ、自分たちがその「青年海外協力隊」になってタンザニアへ行くことになったらという場面設定をし、ロールプレイング(自分たちが授業を行う想定で交流授業を考えたり、考えたものを発表したりした。現地の物や日本の物を使って活動した。)を入れながら渡航に対して何が必要かを児童たちなりに考える活動を取り入れた。



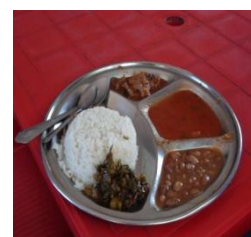
上記の写真：ンゴメ小学校での交流授業の様子と渡航に必要なもののリスト

## 7・8・9時間目

### 「タンザニア〇×」

「タンザニアに行くならタンザニアのことを知らないといけないよね」という導入から、クイズに答えながら、タンザニアの文化や様子を知る活動を行った。

タンザニアに関することが書かれた10～15枚のカードを、4～5人のグループで話し合いながら、「正しい」「間違っている」の2つに分けた。各グループの答えと、「なぜ、そう考えたのか」を聞き、正解とその理由・背景を説明した。正解を聞いて、気付いたことを共有し、その結果、「なんで、象が道路のすぐ近くにいるの?」「携帯があっても電波はないんじゃないかな?」などと自分たちが想像するものと実際に



上記の写真：タンザニア〇×で使用した現地の写真

の違いに気づき始めた。

次の時間は、その自分の考え・想像が実際の様子と同じだったか違っていったか意見を出し合い、なぜそうなったのかを話し合うようにした。元々のステレオタイプが徐々に変化していく様子がかうかがえた。注意したことは、違いがあることが当たり前で、間違った解釈にならないことを考え、写真等を活用した。



右の写真：タンザニア〇×で使用した現地の写真

## 10時間目

### 「イリングのおじさんの思いを感じて」

タンザニア〇×の中で見せた道路の写真から、一つのエピソードにつなげた。担任が「足を挫いたこと」から「村の人と話しながら歩いていただけで足を挫いてしまった」ということ。そこから、道路が日本のように舗装されていないということに児童が気づいた。そして、その村で「電気なのか？水道なのか？道路舗装なのか？」という疑問を投げかけた。という話へつなげた。道路セクターの村人の集まりの中で実際に議論された「電気？水道？道路舗装？」の議題は、結局どれかに絞るということではできなかった。3つとも今のタンザニアにはとても重要であり必要なものである結果だった。

しかし、児童たちは今現在日本には当たり前にあるもので、どれが大事かという考えが理解できないようであった。「災害などで停電した場合は電気が必要だと思う。」「井戸が止まったら、水が必要だと思う。」「道路に穴が開いたら、舗装が必要だと思う」という感想が挙げたように、「あること」が前提でこの課題に取り組んでいた。そのことから、「それが無いもの」という想像までには至らなかったことがわかった。そして、改めて児童に「日本に当たり前にあるものがタンザニアにはない場所がある」ことを伝えると、そのことに驚く児童が多かった。



るものがタンザニアにはない場所がある」ことを伝えると、そのことに驚く児童が多かった。

そして、この後の活動で大きなキーセンテンスになる活動につなげた。道路セクターの村の道路の真ん中で出会った一人のおじいさんが、とても印象的な方だったという話から、児童はそのおじいさんの、日本に対しての切なる思いを知るようになった。特に、「タンザニアのこともっと知ってほしい」というタンザニアのイリングで出会ったおじいさんの思いを知り、自分たちにできることを考えさせるきっかけとした。

上記の写真：現地の写真（両端：研修員 真ん中：イリングで出会ったおじいさん）

### タンザニアのイリングで出会ったおじいさんの思い

- ・タンザニアはとてもいいところ。タンザニア人もとても優しくいい人ばかり。ぜひいろいろな人に来てほしい。
- ・タンザニアはいいところだと伝えてほしい。
- ・日本はどうしてそんなに発展したのか。
- ・今ほしいものはバイク（自転車？自動二輪？）
- ・アンケートを受けたことで何か見返りはあるのか。・・・など

## 11・12・13時間目

### 「桜井小学校や日本のよいところを紹介しよう」 (外国語活動の時間で実施)

おじいさんの思いを感じ、「自分たちにできることはないか」という考えから、「タンザニアのことを教えてくれたから日本のいいところを紹介しよう」ということになった。まずは、日本のいいところ調べをし、インターネットや自分たちで取った写真などを貼り付けて作成した。そして、自分たちが調べ、教師と一緒に文章をつく



上記の写真：日本のいいところを紹介したカード

った。書いた英語の文章がしっかり伝わるかを考え、英語やスワヒリ語等の外国語の単語を自分たちで自主的に調べた。そして、4～5人のグループをつくり、日本のいいところを紹介する活動を行った。

活動を進めていく中で、一部の児童の中に「なぜ外国語(英語やスワヒリ語)で表現する必要があるのか」という考えにぶつかる児童がいたが、原点に立ち返り、活動の意味を問い直しながら活動を進めた。また、「何でスワヒリ語じゃないの?」という児童もいたが、スワヒリ語の読みはほとんどがローマ字読みになっており、タンザニアでは英語も使われていることを伝え、「まずは英語でALTIに伝わるか考えよう」という活動の流れにした。

授業後の感想(小田原市小学校教育研究会外国語部会にて実施後)

- ・英語を覚えられてよかった。
- ・緊張したけど、間違えずにいられたのでよかった。
- ・達成感があった。
- ・もっと(英語が)しゃべれるようになりたい。
- ・スワヒリ語もっと調べたい。スワヒリ語で紹介してみたい。・・・など

#### 14・15時間目

「もし、日本の学校に外国人(タンザニア人)の先生が来たら」(外国語活動の時間で実施)

前時の続きで、「今度はタンザニアの人が学校に来ることになったらどうする」という問いを投げかけた。それに対して「せっかくスワヒリ語も学んできたから、文章にしてみたい」という意見が挙がった。そして、授業の流れから、桜井小学校や日本のよいところの紹介で使ったクラスルームイングリッシュ・キーセンテンスを使い、タンザニアのよいところをALTIで紹介したいということになった。

今回の授業とは別に、学校で行われる国際交流ボランティア授業(外国人を招いて歌や文化を知る活動)の中で、「英語を話してみたい」「韓国の人に英語が通じるかな」「ケニアの人に自己紹介をしてみたい」「スワヒリ語を話してみたい」などの意欲をもち、児童なりに調べたり、教師に聞いたりしながら「言語」にふれ、それを活用しようと努力している姿が見られた。その活動の中から、「もしタンザニアの人が来たら、このスワヒリ語は通じるかな」という思いをもつ児童が増えた。この時間では、自分たちなりに調べたスワヒリ語を使って簡単な文章を作ったが、個人差もあり、ローマ字で書かなくてもよいという条件で「発音」を楽しみ、話す意欲をもたせる活動を重視した。



上記の写真：国際交流ボランティアでの一面  
(ケニア・インド・紺国の人と交流)

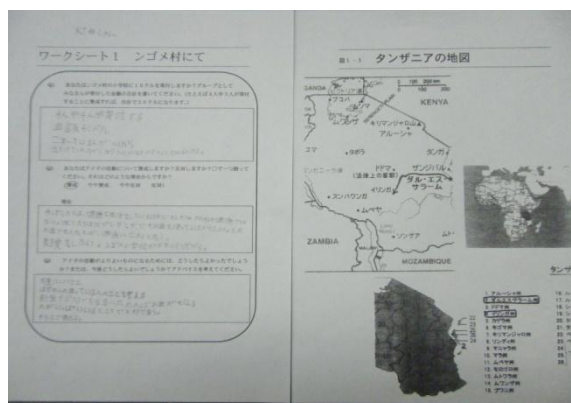
#### 16・17時間目

「世界に目を向けよう～今、みんなにできること～」(「支援」ってなに? 「支援」の前に考えよう)

「外国のことをもっと知りたい」「外国語を話してみたい」と考えるようになった児童に対して、「外国に対して自分たちができること」を中心として最後のまとめの活動を進めた。そこで、5・6時間目に課題として挙がった「支援物資」というキーワードに対して、「支援することの意味がわかれば、タンザニアに行けるね」と児童が考えた。初めて自分たちの考えで日本語以外の言葉(英語やスワヒリ語)で文章を作ったこともあり、外国に行ってみたいという気持ちがとても大きくなっていった。

そんな中、今回の内容では、モノやお金を寄付することの意味、すなわち「国際支援・国際援助(救い助けること)」することの意味について考えることをねらいとし、身近で聞く「支援」という言葉がどういう意味をもち、それが多くの国を助け、そして自分たちの国も助けることになるということを理解し、そのためにはこの活動が一番の近道であるということを知ってもらいたいと考えた。

ワークの内容は、トレッキングに参加した一行が、とある



上記の写真：児童が書いた記入用ワークシートと説明カード

小学校の前で「10ドル寄付してほしい」という看板を見つける。アジアやアフリカではそのような看板をよく目にするのも児童たちに伝え、そのときあなただったら寄付するのかどうかを考える内容である。支援の判断要因にはさまざまな場面で起きたことや事実、条件があり、それらを含めると、判断が左右される内容になっている。この単元で、寄付することに賛成する意見や反対する意見が多数予想されるが、どちらがいいという偏った判断ではなく、「支援をする」ということがその村や国に大きな影響を与えるということを理解させた。

また、実際の教材では、タイのチェンマイにトレッキングに行った際にバーン村の小学校の前で「…10ドル寄付してほしい。」という看板を見つける、という場面設定になっている。そこで主人公が取った行動について議論するのが大きな内容になる。ここまで、「タンザニア」を中心として学習を進めてきたので、授業者が実際に行ったタンザニアのイリンガ州のンゴメ小学校に内容を替え、元々の支援の内容は変更せず、児童の思考にあった流れに変更した。

### 児童の感想

- ・支援について知れたので、これからは募金をちゃんとしたい。
- ・アイ子さんの取り組みに賛成。募金したい。
- ・アイ子さんも募金していてとても偉いと思う。
- ・看板を立ててこれからもお金が入るようにしていたので偉い。
  
- ・アイ子さんの存在がよくわからないので募金しない。
- ・アイ子さんに直接会わないとどんな人かわからないから、怪しい。
- ・使い道が本当にそれらに使っているのかわからないから、募金しない。
- ・金額が高い。
- ・村の人たちは納得していないと思う。村にも募金をするべき。…など

感想にもあるように日頃「支援」という言葉をここまで考えたことはなかったと思う。そして、募金＝支援と考えたと身近な国際協力であることをこの時間で知ることができた。「募金をするときは、考えてやりたい」と児童の感想にあったように、この全体の単元を通して「世界と関わっていくことができる存在」であることを理解でき、今後の授業の幅広がったと実感している。

### ◆ 成果と課題

今回参加させていただいた教師海外研修は「タンザニア」という国であったが、そのタンザニアという一つの国から、世界的視野が大きく広がった。また、広い世界を自らから学ぼうとする意欲が高まったことは大きな成果になった。この研修に参加した当初の目的は、「教育現場での国際理解教育（開発教育）の在り方を考える」ことであった。また、「他教科から国際理解教育へ」のつながりとタンザニアについての学習（国際理解教育）が導入材料とし、活動を広げていくこと。そして、授業計画として確立することを主としていた。そして、最終的には外国語活動のねらいにある「異文化共生」そして「言語理解」の部分にリンクさせる単元計画を考えることが自分の中で最も大きな目的であった。成果として、児童は日本だけではなく外国・広い世界という部分に意図的ではなく自然に興味をもつことができた。「タンザニア」をきっかけとした形ではあったが、他の国でも、まずは「担任教師の体験」からのきっかけでも十分な導入になると感じた。その導入があることで、「外国語（英語）や他の言語を学ぶ意味」がもて、外国語活動を学ぶことや国語科の「外来語」を知る、社会科の「外国との輸入・輸出の関係」などを知ることの必要性をもつことができた。児童の感想の中にもその成果が現れていたと感じる。

しかし、指導案検討や研修報告や授業提案後に「なぜタンザニアなのか」「タンザニアだけに絞る必要はない」というご意見を多くいただいた。タンザニアを学ぶことにどれだけの意味があり、それが将来的に生かされるのかの動機づけがないと、授業を行う側の意欲につながらないこともわかった。他の国でもそれを学ぶ意味を教師自身もって、参加しなければいけない。児童がその国へ直接行くのではないため、意欲づけがしっかりしていないと、教師側の自己満足になる危険性が高いこともわかった。今後の課題としては他の教師も、授業計画を見て同じように授業ができる形を作ることだと考える。上記にもあったようにタンザニアに固執するのではなく「教師自身の海外の体験」を導入とすることで、幅広い形での国際理解教育が実現できると考える。その際、いかにその教材が有効的で必要なものなのかの精選がかなり難しい。やみくもに写真や動画を使うことは危険である。「何を伝えたくて、どの教科とのつながりをもつのか」を大事にし、それに必要な教材を選ぶことが今後の課題である。また、ロングスパンで考え、他の教科との関連性ももちながら、「開発教育」「国際理解教育」を導入とし、授業を構成していくことが自身

の課題でもあり、「開発教育」を外国語活動の中で実施できるための教材開発や教材研究を進めていくことも今後の課題としている。

◆ 参考文献

田中治彦ほか 『「援助」する前に考えよう 参加型開発とPLAがわかる本』 DEAR開発教育協会 2006年 11月 1日発行

◆ 参考資料

現地で収集した資料(左上から)・・・小学校の教科書(国語、算数、理科、社会、英語、辞書、地図帳)  
タンザニアの楽器 タンザニアのお金と米ドル  
タンザニアのお米とタンザニアに売っていたインディカ米  
タンザニア(マサイ族)の民族衣装 インゴメ小学校の児童と歓迎会での様子  
タンザニアのイリンガ(道路セクター)の道路で荷馬車をひく牛  
タンザニアのイリンガの裏通り食品マーケットの様子  
バオバブの木

